

くらしと協同をたずねて

奈良県吉野郡川上村の地域づくりから学ぶ

奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科

稲毛優香・齊藤小晴・中山穂南・山本真依・横山沙哉伽
(監修) 青木美紗

奈良県吉野郡川上村は、奈良県の中東部の山間部に位置する村である(図1)。その面積は269.26km²であるが、うち約95%が山林となっており、山や川といった豊かな自然に囲まれている。高度経済成長期には吉野林業で栄えた地域であり、また建設に半世紀を要した大滝ダムがあることでも知られている。

人口は1,267人、そのうち65歳以上人口が59.75%(2016年10月時点)を占め、県内で最も高齢化が進んだ地域となっている。

川上村における現在の村づくりは1996年に発信された「川上宣言」に基づいている(表1)。この宣言は、川上村が紀ノ川(吉野川)の源流に位置することから、「川上村に暮らす住民はもちろん、下流域の人々とも手を携えて、かけがえのない水と森を育てていきたい」という願いと決意を込めて提唱されたものである。

この宣言を具体化するために、水源地の森を守る取り組み、未来への風景づくり、

東部地区暮らしがつづく集落づくりプロジェクト、紀ノ川流域の生産者をつなぐ「紀の川じるし」¹⁾、地域おこし協力隊²⁾や大学生インターンの積極的受け入れ、大学との連携など、多方面からの村づくりに取り組んでいる。

このような川上村の村づくりについて学ぶことを目的として、2017年11月27日に奈良女子大学の学生11名が村を訪問した。まず、川上村役場において地域振興課課長から村の概要について、地域おこし協力隊から活動内容についてのお話を伺い、次に源流館を訪問し、そして一般社団法人「かわかみらいふ」において取り組みに関するお話を聞かせていただいた。また、奈良県生活協同組合連合会の森宏之会長に同行いただき、村と市民生活協同組合なら

表1 川上宣言

- 一、私たち川上は、かけがえのない水が作られる場に暮らす者として、下流にはいつもきれいな水を流します。
- 一、私たち川上は、自然と一体となった産業を育て山と水を守り、都市にはない豊かな生活を築きます。
- 一、私たち川上は、都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値に触れ合ってもらえるような仕組みづくりに励みます。
- 一、私たち川上は、これから育つ子ども達が、自然の生命の躍動に素直に感動できるような場を作ります。
- 一、私たち川上は、川上における自然との付き合いが、地球環境に対する人類の働きかけの、素晴らしい見本になるよう努めます。



図1 奈良県川上村の位置

コープの関係についてもお話いただいた。今回は、学生たちが山間部に位置する川上村の地域づくりについてどのように捉えたのかを紹介させていただきたい。

村民の交流の場：「やまいき市」

「やまいき市」は村内で生産された野菜を販売している朝市で、地域おこし協力隊の隊員が、村内の小さな畑で作られた野菜を村内で流通させたいという発想で始められたものである。毎週土曜 9:30～15:00 頃まで開催しており、販売している野菜はその日の朝に集荷されたものである。「やまいき市」という名前には、「山をいかす、山といきる」という意味が込められている。

今回の村への訪問以前に、インターン生として川上村に2週間滞在したときから、この「やまいき市」が気になっており、この市の目的には、「川上村に観光客を呼ぶため」「村内を活性化するため」の2つがあるのではないかと考えていた。今回の訪問で地域おこし協力隊の「やまいき市」担当者に話を伺い、「やまいき市」の村内における機能について学ぶことができた。

まず観光についてであるが、この担当者は「やまいき市では、ワークショップを開催しているため、その取り組みは観光客誘致につながっているかもしれないが、利用者の多くは村民です」とおっしゃっていたことから、「村外の人を呼び込む観光による村の活性化」という当初抱いていた観点とは少し異なることがわかった。そして、「川上村産の野菜を『源流野菜』として、川上村の看板商品にしたい」と話されていたことを踏まえると、川上村に一時的に外部の人を呼ぶというよりは、川上村の知名度を上げ、村外で川上村産野菜を広めビジ

ネス化し、少しでも村内の収入を増やすことで活性化させたいと考えていることがわかった。

次に、「やまいき市」による村の活性化についてである。「やまいき市」では、村民の家庭菜園程の小さな畑で育った野菜を、スタッフが直接集荷している。この活動は、以下の二つの側面から、高齢者の生きがいになっていると考えられる。一つ目は、「自分の作った野菜が売れることで生活費の足しになる」ということ、二つ目は「地域おこし協力隊などの若いスタッフと交流することができる」ということである。地域の活性化を「高齢者の方々が生きがいを持って元気に生きていけるようなシステムを作ること」と捉えれば、この「やまいき市」が村の活性化に大きな役割を担っていることを感じる事ができた。

「やまいき市」は、村民の力を使って運営している、非常に興味深い取り組みであると感じた。(中山穂南)

民間事業者と取り組む 買い物支援

川上村東部では、暮らし続けられる村づくりを目指して、村が関わって「一般社団法人かわかみらいふ」(以下、「かわかみらいふ」)が設立されている。「かわかみらいふ」では、移動スーパー事業、宅配事業、公共施設のリニューアルなど、村民のための総合的な取り組みが行われている。

「かわかみらいふ」が行っている移動スーパー事業や宅配事業といった買い物支援事業は、吉野ストア株式会社(以下、吉野ストア)と市民生活協同組合ならコープ(以下、ならコープ)と連携したものであり、「かわかみらいふ」が配達や移動販売車を

代行するという形態をとっている。「かわかみらいふ」がこれらの代行業を担う前は、吉野ストアが移動販売を、ならコープが宅配を、それぞれ川上村で展開していた。しかし、吉野ストアは大淀町の会社であり、ならコープは奈良市内に本部を置く生協であるため、村のお金が村外に流れる形になっていた。そこで、2016年10月から、「かわかみらいふ」が吉野ストアとならコープの移動販売と宅配の代行を始めることで、村のお金は川上村の中に返ってくる仕組みを構築した。

吉野ストアとならコープは、「かわかみらいふ」に手数料を払うことで、移動販売や宅配が困難な場所へ行くことなく売上を維持することができ、配送コストの削減となる。一方、「かわかみらいふ」は販売宅配の代行をすることで、手数料を受け取って村民のためのサービスを提供している。また、「かわかみらいふ」で働く人には村民を雇用していることから、利用する村民一人一人を村民であるスタッフが知っており、移動販売や宅配と同時に村民の見守りも行うことができている。利用者の村民は知っている人に移動販売や宅配をしてもらうことができ、安心して利用できる。このように「かわかみらいふ」が吉野ストアとならコープの販売・宅配を代行することで、



図2 移動販売の様子

関わっている組織と人の全員にメリットがあるしくみを構築しているといえる。

このような取り組みが他の地域でも見られるのか、ならコープ以外の生協の取り組みを中心に調べてみた。その結果、コープぎふでは、住民の要望による豪雪地帯への配達や、ジョイントサービスという組合員自身による個別配送によって配送の効率化を図っている。また、コープかごしまでは、県内の25の有人離島すべてで共同購入を実施しており、島内の配送は地元の配送業者に委託しているという。これらより、各地域に合わせた買い物支援への取り組みがあることがわかったが、川上村のように住民が主体となって、村と生協が協力し買い物支援を行っている地域はあまり見られなかった。

様々な事例を知ること、その地域に適した買い物支援を考えていくことができるのではないだろうか。(稲毛優香)

村民に受け入れられる事業

「かわかみらいふ」の買い物支援事業が続いているのは、行政や「かわかみらいふ」の方々の熱意や仕組みの内容に加えて、以下で述べる「サービスの細やかさ」と「住民の協力」という特徴があるからではないかと考えた。

まず一つ目の、サービスの細やかさについてである。「かわかみらいふ」の買い物支援は、商品を運搬するだけでなく、ドライバーが利用者の好みや生活の実態を把握しており、それに合わせて商品を調達・販売できるということが大きな強みである。また買い物の支援だけでなく、コミュニケーションを図ることも大きな目的の一つとしているということにも感銘を受けた。

配送車の日誌を拝見したが、訪問した利用者やそのご家族の誰かが病気だとか、いつも利用する村民が買いに来られなかったなど、健康面や生活についてはもちろん、「こういうことをおっしゃっていた」「こういうものをいただいた」など、「かわかみらいふ」のスタッフと利用者である村民とのやりとりが詳細に書かれていた。住民の生活実態に合ったサービスを行うことで、物質的な需要を満たすだけでなく、精神的な需要を満たすことができ、次に述べる住民の協力を得ることにつながっているのではないかと考えた。

二つ目は住民の協力である。例えば、雪が降った日に、「今日は配達に来るから」ということで、配送者がスムーズに来ることができるよう、住民の方々が自発的に雪かきを行ってくれたというお話を伺った。地域内に点々とする山間集落に食品等を届けることは事業者にとって大変負担なことであり、雪がそのまま残っていたら、まず配送担当者は雪かきから始めなければならず、時間は大幅に遅れてしまうし、回れない地域も出てくるだろう。一般的に住民はサービスを受ける側であるが、完全に住民が受動的になっていると事業はうまく進まない。住民も成功させようという意思を持って協力していくことが重要なのではな



図3 かわかみらいふでの聞き取りの様子

いかと考えさせられた。

住民の信頼を得ることで、よりきめ細やかなサービスを行っていきける、このプラスの循環こそが支援を続けていきける理由の一つではないかと感じた。(山本真依)

奈良県初の 公営サービスステーション

2017年4月にオープンした「かわかみサービスステーション」(以下、かわかみSS)は、「かわかみらいふ」が運営するガソリンスタンドである。川上村では高齢化などが原因で、年々モノやサービスを提供する店舗が減少しており、ガソリンスタンドもその一つであったようだ。長年ガソリンスタンドを経営されていたご夫婦は、体力的にも経営を続けることは困難であり後継者も見当たらないため、2016年7月に川上村の村長に相談したという。その後、川上村が検討し、「かわかみらいふ」に委託することで公営のかわかみSSを開設することが決まったそうである。川上村からガソリンスタンドがなくなると、最寄りのガソリンスタンドまでは車で20分以上かかるため村民の生活に大きな影響が出てし



図4 灯油の自動販売機

まうのである。特に冬場の灯油の供給には大きな問題が出てしまう。

かわかみ SS の特徴は、ガソリンを給油するだけでなく、福祉的サービスも備えていることである。主な役割である給油の他、見回りも兼ねた灯油配達や灯油の自動販売機の設置、また村民限定のカードの作成などに取り組んでいる。

他にも、灯油の自動販売機を使用する際に、そのままお金を投入して購入するのではなく、一度ふれあいセンター（「かわかみらいふ事務所」）に足を運んでバーコードが印刷された紙を購入し、それを読み込ませて灯油を購入する。こうすることで、村民と「かわかみらいふ」職員がコミュニケーションを取ることができる仕組みとなっている。このように村民の安全を守り、村民が暮らしやすい環境を作ることも目的にしているのである。

村民が買い物に不便を感じているのなら空き地にコンビニを誘致した方が簡単であると都会にいると考えるかもしれない。また、ガソリンスタンドが廃業するなら村外の地域の経営者を募集する方が簡単かもしれない。しかし、そうせずに「かわかみらいふ」が事業を運営する理由は、村民が川上村のことや住民のことを一番考えているからであると感じた。（齊藤小晴）

村民が村民のために

「かわかみらいふ」は設立後一年が経過したとお聞きしたが、一年間の取り組みを振り返って「村民の皆さんに私たちが支えられると感じるようになった」と事務局長がおっしゃっていたことが印象深かった。村民からの「ありがとう」「助かるよ」といった言葉のひとつひとつが大きな仕事の

原動力になる、ということである。このような利用者からの声が「色んなお困りごとのできる限り対処していきたい」という思い、そして新たなサービスの創出に繋がっているのではないだろうか。

今後の課題に関して、川上村を「高齢者を預けっ放しにする場所にはせず、その家族と地域との関わり方を考えていく必要がある」と述べていたことが興味深かった。川上村では、若年層の村外流出よりも、高齢者の村外流出が深刻であることが、「かわかみらいふ」の独自調査で明らかになったそうだ。そのため、高齢者が村外から出なくても生活できるようなサポートに取り組んできた。

しかし、やはりご家族の支援は大事であることから、川上村の住民のご家族は村外に住んでいる人が多いが、そのようなご家族にも何らかの形で関わってもらう方法を考えているという。「かわかみらいふ」の取り組みは人々の生活に密着した非常にきめ細やかなものであるが、村民に対する家族の役割が大事であることもやはり忘れてはいけないう。今後、どのように村と家族が関わりを持ちながら支え合いの形を作っていくかが課題であるとのことであったが、地域が一方向的にサービスを提供するのではなく、地域と住民が「互いに」支え



図5 かわかみらいふ前にて

合うことが重要だという意識は、現在行われている取り組みの随所に見られると感じた。

「かわかみらいふ」の取り組みは住民が主体となって「村民が村民のために」行動する仕組み、そしてその意識を創り出している。行政からサービスを受けるだけでなく、住民も村の施設や人と関わりを持つことで、「自分はこの地域の住民である」という意識や愛着がより一層強くなるのではないだろうか。川上村に住む人々の「地域と関わって生活している」という意識や満足感が、都市部での暮らしにも負けないメリットとなって住民たちが村を支えているのではないだろうか。(横山沙哉伽)

まとめにかえて

川上村での多面的な取り組みについてお話を聞くことで、普段はなかなか感じることができない、生活をみんなで向上させるためのサービスのあり方や人々の温かさを感じさせていただいた。村内経済循環のしくみ、村民の主体的行動を引き起こすしかけなど、村づくりや地域づくりにおいて参考にできる点が多く見受けられる。村内には他にも、林業に従事する人々、素麺を生産しているご家族、かきもちを生産している女性グループ、樽丸を生産している人々など、生活の中で伝統を守り続けている人たちがいる。このような貴重な資源をうまく循環させながら村が盛り上がるような活動が生まれてくることを今後も期待したい。

今回の訪問にご協力してくださった川上村の皆様、奈良県生協連の皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) 「紀ノ川じるし」は川上村の源流がある紀ノ川流域の一次生産者の商品をブランド化したものである。奈良県と和歌山県をわたる1本の川による森・里・海のつながりを“見える化”し、流域ぐるみの地産地消を進めるため136kmの川を一つの商店街に見立てた取り組みである。
- 2) 地域おこし協力隊制度とは、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱し、隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場製品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組である(総務省より)。2009年に総務省によって制度化された。

奈良県
川上村地域おこし協力隊

パン職人募集

川上村を美味しいパンで一杯にしてください。

住民はパン好きが多いのですが、村にはパン屋さんがありません。
かわかみらいふでは「ふれいあいセンター」でパンを製造・販売が可能な「パン職人」を募集しています。
自然豊かな水源地の村で村民に美味しいパンを届ける仕事をしませんか。

かわかみらいふは
「移動スーパーの運用」や「よろこびと安心の拠点づくり」など村民の日々のくらしを支える一般社団法人です。

募集期間

平成 29 年 2 月 3 日まで

面接試験の日程については調整しますのでご相談ください。採用予定 29 年 4 月 1 日 勤務地は「かわかみらいふ」になります。

奈良県川上村 (定住促進課 松本・嶋田)
TEL : 0746-52-0111 FAX : 0746-52-0345

「川上村地域おこし協力隊」募集ポスター
(かわかみらいふHPより)